



たいしも通信

下関戦跡シリーズ8回目、今回は下関海軍防備隊です。皆さま既にご存知とは思いますが、場所については現在の海上自衛隊下関基地隊(以下「下基(しもき)」と略)のところ。陸軍の下関要塞と混同されがちですが、こちらは海軍です。また、同じく下関市内にある小月基地に比べ、その沿革についても意外と知られていないのではないのでしょうか。隊友会下関支部には下基勤務経験者も一定数おられ、下手な事を書くとお叱りを受けそうなので慎重に。幸い下基の公式HPにその沿革が詳しく記載されていますが、あまりに詳しく過ぎるため、ここでは抜粋して紹介します。

◆下基の沿革と下関海軍防備隊の歴史(抜粋)

1864年(元治元年)の下関砲撃以来、下関海軍防備隊の重要性から要塞地帯に指定、下関重砲兵連隊(陸軍)が任に就いていたが、日華事変以後はさらに海峡の重要性が高まり、市内の吉見に「下関海軍防備隊」を設置しての関門防備が命じられた。施設は昭和15年に着工、寒村(失礼?)の吉見に昭和16年には一大城郭が出現、昭和17年に完成後は小型の軍艦も停泊するようになった。

1945年(昭和20年)、米軍は飢餓作戦から関門海峡への機雷敷設を開始。3月になるとB29により計2回177機、4月にも約30機による機雷敷設が実施された。2回目の機雷敷設後、関門海峡航行禁止が告示され、下関防備隊は掃海を開始。兵力も増援されたが4月中の触雷被害は艦艇14隻、民間船舶33隻にも上った。

その後、対馬海峡/関門海峡防衛の専任部隊として第7艦隊が編成され、下関海軍防備隊は呉鎮守府から移籍、当初兵力は本隊人員約600名のほか、蓋井島等5カ所に防備衛所(人員約330名)を、角島・六連島に特設見張り所(人員約20名)を置き、船艇等7隻を保有。主対象は敵潜水艦であったが、対空防衛用の機銃68門を

陸上にも装備した。

5月に入りB29による機雷敷設が激化。5月だけでも9回約120機、6月にも9回約150機、7月以降は戦禍により資料も残っていないが、日本全体に14回の機雷敷設が行われ、その半数程度が関門地域に集中したと推定されている。

8月に日本が無条件降伏した後も、米軍資料によると関門地区には4,329個もの機雷が残存しており、海軍は終戦後も下関防備隊跡に下関掃海部を置き掃海隊による航路啓開に努め11月の海軍解隊後も掃海部は復員省所属となり作業を継続。1948年(昭和23年)の全国掃海部解体後も下関掃海部だけは作業終了の見通しが立たず、同掃海部のみ存続となる。

米軍は当初、機雷の電池寿命は昭和23年頃までで以後無力化する」と通告していたが、現実にはそれ以後も触雷事故が絶えず、米軍はその都度機雷の寿命見積を延長したため下関掃海部は解散できず、海上保安庁、海上自衛隊と所属が変わりつつ昭和40年代まで下基による関門の掃海は継続された。

◆下関海軍防備隊跡について

海軍防備隊の土地建物の一部は既述のとおり掃海部隊が使用、現在の下基に引き継がれているが、他の部分には昭和21年、釜山水産専門学校から引き上げた教員・学生受け入れのため水産講習所下関分所が設置され、現在の水産大学校となった。

▼編集後記▲▲

機雷など大昔の話のような気がしますが、他県の港とは言え昭和47年にも国内で触雷による死亡事故が発生しています。古株の市議からは、自分が幼少の頃は関門に小船で出る際は卒で機雷をどかしながら進んだこともあると話しておられました。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。